

特別寄稿

女子アスリートの身体的、心理的、環境的課題に関する考え方

—ロンドンオリンピック・パラリンピック出場選手を対象とした比較調査から—

佐藤 馨

びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部

本研究は、オリンピック、パラリンピックに出場した女子アスリートを対象に、女子アスリート特有の身体的、心理的、環境的課題に関する考え方を明らかにし、今後の女子アスリートを取り巻く競技環境改善につなげるための基礎資料を得ることを目的とした。調査対象は、ロンドンオリンピックに出場した女子アスリート156名とロンドンパラリンピックに出場した女子アスリート45名であった。結果として、トレーニングやコンディショニングにおいて女性特有の身体的課題に関する情報提供については、オリンピック、パラリンピック選手の半数以上が女子アスリートに特化した情報提供や研修機会等の必要性を感じている一方で、約4割がそうした必要性について認識していない現状が示唆された。女性特有の身体的課題が競技に影響した経験については、オリンピック、パラリンピック選手の約6割が経験しており、具体的には、「月経痛（腰痛、腹痛、頭痛）」「月経による体調不良」が圧倒的に多かった。さらに女性特有の身体的課題に対するサポート充実については、オリンピック、パラリンピック選手ともに約3割が必要性を感じていたのに対し、それを認識していない選手は約5割に達していた。加えて、女子アスリート支援に関する情報へのアクセス状況を見ると圧倒的にしていなかった。また女子アスリートはパフォーマンスを支える機関や女性スタッフの増員を望んでいることが分かった。

キーワード：女子アスリート 身体的・心理的・環境的課題 ロンドンオリンピック・パラリンピック

I 緒言

IOCによれば、夏期オリンピック大会における女子アスリートは年々増加傾向にある¹⁾。オリンピックへの女子アスリートの参加は1900年パリ大会（第2回）からで、当時の参加率は全体の2%と僅かであった。しかしながら100年以上の時を経て2016年のリオデジャネイロ大会（第31回）では、女子アスリートの比率は37%と約4割に達し²⁾、こうした女子アスリートの出場率は、社会における女子への期待にも繋がるといえよう。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え、国内ではオリンピック・パラリンピック候補とされる選手に注目が集まりつつある。中でも女子アスリートへの期待は高い。例えば文部科学省およびスポーツ庁では、2013年度（平成25年度）より「女性ア

スリートの育成・支援プロジェクト」として予算を配分し、「女性特有の課題に着目した調査研究や医・科学サポート等の支援プログラム、女性競技種目におけるハイレベルな競技大会の新たな開催を通じた女子アスリートの育成、トップレベルの女性コーチの育成プログラムを実施し、女性アスリートの国際競技力の向上を図る。」³⁾として女子アスリートに特化した研究への支援を始めている。このように女子アスリートに対する期待は、国家レベルにおいても同様に見受けられるのである。

それでは、研究において女子アスリートを対象としたものはどの程度あるのだろうか。それを確認するため、Google Scholarを用いて「Female Athletes」をキーワードに検索を行った。結果、全体として543,000件の文献がヒットし、さらに年代を絞ると2000年以降で363,000件、2010年以降で112,000件、2016年以降で